

岸边にて

ブリエンツ（スイス）

空よりも明るいみずいろの湖水は
波と呼ぶにはあまりに小さなさざめき
ひっそりと渡り始める、僕の五感
光によって架けられた揺れる橋を
確かに水の上を——歩いていた

どこかで呟いている声がある
「いつまでも、この畔に佇んでいたい」と
それは本当に君の言葉だったろうか
それとも黒いパンの鳴き声だったろうか
多分全てが谷間に沈んでゆく

隣にいた君がふいにカメラを構え
僕の目の前におおいかぶさった時の
細い身体と笑顔と、別の湖と——
多分、全てが湖底に沈んでゆく
一言も交わさないすれ違いの思い出と一緒に

僕の存在が次第に無に帰する、だが
お前たちは来年もここに居るのだろう、その時は
やはり同じように誰かがここに佇む姿を

君が僕を見つめる瞬間^{とき}のような不思議な瞳で
見つめてあげるといい、優しく泳ぎ寄って

(1984.3.22)